

江口章子物語



さわ桔梗

おのが心の紫は

秋山深き湖（うみ）

にこそうつせ

女人山居



- 一話 増尾少林寺の歌碑
- 二話 生い立ち～白秋との別れ
- 一話 増尾少林寺の歌碑
- 二話 生い立ち～白秋との別れ
- 三話 章子の悲嘆
- 四話 戒仙和尚と松戸栄松寺
- 五話 増尾の辻堂
- 六話 戒仙和尚との結婚
- 七話 戒仙和尚との別れ、山科醍醐園と戦争
- 八話 死の床
- 九話 少林寺の歌碑
- 十話 少林寺の歌碑
- 十一話 短文・和歌

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子①

① 昨年7月より今年2月迄、8回に渡り、武家相馬氏を探訪してきた。発端は増尾3丁目の少林寺、寺の由縁碑（昨年6月号参照）からであった。・・・お付き合いに・・・感謝。

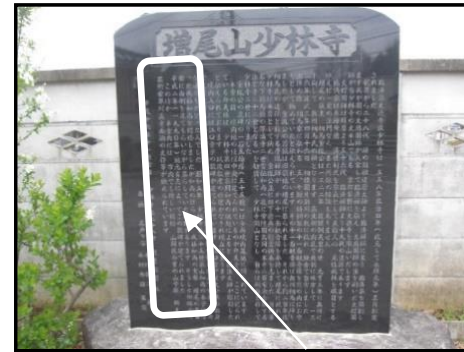


② 今回からのテーマは、同碑文の末尾6行に渡って記されている女流歌人（詩人）江口章子（えぐち あやこ）である。

③ 由縁碑の末尾部に次の一文がある。長くなるが探訪の発端なので同女に関する部分の全文を紹介する。

【境内入口には江口章子の歌碑が建てられています。江口章子は大分県の出身で文豪北原白秋の2度目の妻であり、自身も詩作に才を発した人でしたが数奇な運命をたどった人でした。昭和5年少林寺第25世巢山和尚の養子になった戒仙和尚と結婚しましたが和尚の計らいで実家、増尾の豊田家に面倒を見て貰いながら暮らしていた時期があります。そうした御縁から平成2年（1990年）地元有志によってこの歌碑が建てられた（由縁碑文より）

④ この記述より分かる事は・境内に歌碑がある・大分県出身・北原白秋2度目の妻・自らも詩作・数奇な運命を辿る・戒仙和尚の妻・増尾に在住・この時戒仙和尚と同居ナシ・豊田家の世話を受ける。



このあたりに江口章子の記述あり
少林寺山門前 由縁碑
山門を入り左手にある歌碑→
裏面に解説文がある→



⑤ 歌碑に刻まれているのは増尾在住時の作、章子の和歌一首 全高2m幅0.9mに及ぶ立派なもので平成2年に建立されている。

「手賀沼の みずのほとりを さまよいつ
葦かる音を わがものとせし」

どの様に解釈したら良いのだろうか？数ある遺作の内、郷土が詠みこまれているので建立者は選んだのだろうか。余りに平易、キーは（さまよい）と（葦かる音）か？悩んでしまう。私はこう思う・と、どなたか、どなたかヒントなりご教授頂きたいもの。

歌碑裏に刻まれた江口章子略歴 全文紹介

明治21年4月1日大分県西国東郡香々地町にうまれる。上京し平塚らいてうの青鞥社に入る。北原白秋と結婚 4年後に離婚
大徳寺塔頭聚光院住職中村戒仙師（少林寺住職中村巢山和尚養子）を知る。師の計らいで土村増尾の辻堂（寮）に寄寓、詩文集「女人山居」を著す。後に師と結婚、歌集「追分の心」を出版する。昭和21年12月29日故郷にて病死す。
平成2年9月23日 江口章子文学愛好会建

【参考文献】・少林寺由縁碑文・wikipedia・瀬戸内寂聴「ここ過ぎて」・浦久淳子「柏のよもやま話」・末永文子「城ヶ島の雨」・真説江口章子の生涯・豊後高田市教育委員会編「江口章子」・林真理子著「白運れんれん」

この地に縁（えにし）が深いこの女性を紹介して行く。

☆ 次号（4月）にて章子の前半生を探訪する（文責：荻野）平成25年3月

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子②



- ① 江口章子（あやこ）「明治21年生～昭和21年没、享年59歳」大正～昭和の初めに活躍した国民的詩人「北原白秋」の2度目の妻である。白秋は生涯3度結婚した、章子にとっても2度目の夫であった。
- ② 生まれは九州国東半島香々地（かかち）、現豊後高田市香々地。米回船問屋を営む素封家に生まれた彼女は、聡明な少女であり当時の女性では少ない高学歴。大分県立第一高等女学校に主席合格の記録もある。髪はひさし髪に結う。着物に海老茶の袴を胸高に穿く、袴の裾の白線は第1高女のみ赦された証。章子は誇らしげであったに違いない。
- ③ とある検事に見初められ卒業を待たずに結婚、が数年を経て離婚上京する。女性活動の理論的支柱「平塚雷鳥」の青踏社に入る。時は大正デモクラシー、女性運動の高まりの中、岡本かの子、伊藤野枝、野上弥生子、柳原白蓮、与謝野晶子、松井須磨子等と交流。この頃、白秋と知り合い（26歳）同棲後結婚に至る。（29歳大正5年）
- ④ 愛を育んだのは東葛飾郡真間（市川市真間）→南葛飾郡小岩村（江戸川区小岩）この小岩時代の寓居は、市川市甲府台の里見公園に移築され現在でも往時の面影を偲べる。（右写真参照）この時期、白秋は人生最大の苦難の日々、章子は献身的に任えた様だ。
- ⑤ 九州柳川で造り酒屋を営む白秋の実家、市内の大火に見舞われ没落。一族が東京の白秋を頼って上京。極貧とスランプに悩むこの頃の白秋の一文が残る。「私の傷つき果てた心が今や新たなる女性の為に甦り昔の若々しい思い出の時代が、再び自分の脈管に燃え立つを感じる。中略この妻は私とどんな苦難にも耐えてくれるだろう」と。章子は無くてはならない人だったのだ。こたえる章子の和歌も残る。「ひとときの 君の友とて生まれ来て 女のいのち まこと捧げん」

エピソードが残されている。葛飾郡小岩村に居住していた頃である。白秋の詩は売れず、章子も又働く術を知らない。生活は困窮の限り、竹の子生活、だがペットの犬や兎を飼い庭に群れする雀に米のエサを与えるのが日課だった。

とある日、雀にエサをやるべく米櫃を開ける夫妻、そこに米は一握りしか残っていなかった。白秋が妻に言う「こんなに貧乏ですまない・（雀には・・・）」若妻の印、赤い手絡が愛おしい丸鬘の章子が答える。「おあげなさまよ、いよいよ貴方がお困りになった時、あの雀達がきっと一粒づつお米を啜えて来てくれますよ。」と、何という、絵に書いた様、素敵な展開か！



「素庵半白」（市川市甲府台）
小岩時代の移築寓居、2K風呂ナシ？
瓦屋根、杉板の外装・板戸、裏手には汲取口、すずらん型玄関灯、懐かしい！

- ⑦ 共通の文学的土壌に花咲かせた二人の生活を病弱ながら章子は必死に支えるのであった。章子の献身を触媒としてか、白秋の作品は輝きを増し大爆発爆発、国民に文壇に大反響、支持を受け一躍時代の寵児名声と富を手にする。が、しかし人生は伴せだけの2時間ドラマや映画ではない、破局がめぐって来た。濃密で清冽な二つの個性の融合ゆえ、なおの事、物質の豊饒化とは反比例に絆のほころびを呼んだ。いつしか、夫妻の心には越えられぬ位相が生じていた。
- ⑧ 小岩～東京～小田原へと居を変える白秋と章子。小田原市天神山（現南町）の新居に「離れ」を増築する事となる。お披露目を親戚知友人にする。園遊会を行い小田原芸者総出の派手な企画が章子らしい。将（まさ）に、その夜、章子は出奔する。出入りの編集記者「池田林儀」と。理由は白秋親族との確執が因との説もあるが、真相は不明。直後章子は平塚雷鳥に駆け込み白秋との取り成しを頼むも取り合ってもらえない。やむなく共通の友人谷崎潤一郎に懇願。谷崎は受諾。熱心に白秋と仲介交渉をするも、妻の不貞を訝（いぶか）る白秋と話は決裂する。為に、谷崎と白秋は不仲となり生涯会う事はなかったという。出奔より23日後、章子白秋と離婚。（33歳大正9年）
☆ 次号では 章子の33歳～39歳までを探訪する。（文責：荻野）平成25年4月



スズラン型玄関灯

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子③

☆ 前月号末尾にて紹介、小田原の住まいの増築お披露目、将にその日編集記者（池田林儀）と出奔した章子、間もなく白秋と離婚。と

- ① 少女期章子の実家、落陽期ではあったがまだ十分に資産はあり、素封家の残照として輝いていた。最初の夫は弁護士→検事、時の超エリートである多くの使用人にかしずかれ、東京より取り寄せた詩歌・小説・評論に親しみ、琴や舞に興じるのが日常の過ごし方だった。
- ② 章子は経済的苦労を知らない、武家のお姫（ひい）様のように、良家の子女の気分そのままに三十路を越える。胸を患った病弱な身であった事もこれに加った。与謝野晶子ほどの文学的才能や経済力は無く、伊藤野枝の底辺を生き抜く野生もない。人生を、生活を、創作活動を＜生き切る＞力不足は否めず、それだけに、より内面からせり上がる情念のみが暴走し自他の心を狂わすほど破壊的に表出してしまう。己が最大、身近な者ほど多く傷ついた。白秋の才能開花を誘発した最大の功労者に違いはないのだが。この後、章子は更に現実（うつしよ）と燃え滾る（たぎる）情念の亀裂の拡大に苦しみつ、煉獄の道を歩んでゆく。（33歳大正9年）
- ③ 30代の年齢帯は、男女を問わず人生上最も重要な時期と言える。10～20代での「学びと経験」が堆積化でき、1人の人間としての確固たる人格の土台が創れるか否かで、ほぼその人の、終焉迄の「人となり」「在り方」「在り方」が決まるといっても過言ではないだろう。（ここでの「在り方」とは経済的な安定より、人として自他共に意味ある「存在」として在りえたか？と言う意味あいだが。）この間を章子は学びも経験もない童女のように、ただ修羅の道を進む。
- ④ 別離後、郷里へ帰る。没落していたが家督を継いだ義兄やその妻に疎んじられる。章子は家産を剽窃されたと怨念を持つ、確執は火花を散らしとても安住どころではない。母の実家の寺等近郷を転々とし、白蓮の別府の屋敷に永逗留したのもこの頃である。（33歳大正9年）

- ⑤ 章子17歳の折病没している母「サダエ」は大分県勢家町の真宗寺院「威徳寺」の娘である。章子には深く仏門の縁はあったのだ。京都大徳寺内尼寺芳春院へ参禅修行に行く。この修行で2人の僧侶と出逢う。・聚光院の戒仙禅師と・一休寺の大空禅師だ。どちらも芳春院へ来て参禅の修行を教導する、いわば仏法の師であり章子は弟子の立場だ。（大正12年34歳）

↓江口章子の写真4葉、右端男性は北原白秋



- ⑥ 故郷豊後高田の香々地にて、地元女子教育の為私塾「ボプラ学園」を開設するも一人住まい、私生活の乱れもあり（アルコール中毒？）半年で閉鎖、狂気の様相が少し始まる。突如「女工解放」を叫び京都綾部の郡是製糸へ入社移住、労働運動に目覚めたか？。前年京都にいた折、京大出の社会活動家水谷某に思いを寄せた影響か？4ヶ月で退社。（35歳大正11年）
- ⑦ 突然、修行の師、大空禅師と結婚を発表、この白秋前夫人はあけすけに取材に応え、ゴシップ誌側では恰好の記事元だった様だ。但し、届は出しておらず2～3ヶ月後章子出奔、為に筆者は「結婚歴」にカウントしない。この頃より戒仙禅師との交流が深まる。これも又章子の思い入れか。禅師は自分を見つめる弟子の潤んだ視線に多少違和感を感じながら、無下にもできず、上手に導師として仏弟子に應對していたのではなかろうか？（36歳大正12年）
- ⑧ 何度目かの故郷、山深く農家の山小屋に住み郷土文芸誌の活動を始めるも長続きしなかった、がこの時期の創作が3年後詩文集「女人山居」として処女出版される。京都・東京・九州を彷徨い続け。そして増尾へ。（39歳昭和元年）

☆次号では 章子の39歳～40歳まで増尾時代を探訪する ☆

（文責：萩野）平成25年5月

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子④



① 章子は恋多き女性であった。彼女の心のうちでは、それぞれの恋に終焉はなく、新たな恋がどんどん加算されていったようだ。流転の局面で新しく出逢った男性が新たな恋の対象となる。既婚、未婚、年長、年下、富、権力、社会的立場、とは無縁な恋、自分がどう思われているかさえ斟酌（しんしゃく）していない。唯、恋情をひたすら一途にぶつけてゆく。その想いは穢れがなく純粋である故、偽りが無い。対象者は戸惑い驚き「何とかしてあげねば・・・」と心を動かされたのでは？

② その様な男性の一人に、章子の後半生に深く関わることになる中村戒仙禅師がいた。戒仙禅師は土村増尾の出身、京都大徳寺で修行を終え、塔中の聚光院、その住職を務めていた、この時戒仙禅師46歳。聚光院は茶道の総元締め千家の菩提寺、千利休の墓もある由緒ある寺であった。重職である。総本山大徳寺の貫主（かんしゅ・総代表の意）の候補者でもあり、おおいに将来を宿望されていた。

③ 前号、末尾でのべたが、故郷の山間的小屋で著作を貯めていた章子、突然戒仙禅師を頼り上洛する。今までの様に参禅修行の為ではない。思いつめていた。戒仙禅師はその時、自坊（松戸馬橋の榮松寺）行ってお京都大徳寺に不在であった。章子は直ちに後を追ひ千葉県松戸の同寺に行く。思ったら即行動、迷いが無いのが章子らしい。しかし、すれ違ひ、禅師は一時京都へ戻っていて逢えなかった。寺人の計らいでしばらく待つ事とあいなった。

④ 京より戻った禅師は、章子のいる事にその口から出る言葉に驚いた事だろう。もとより事前に何の話も了解もなされていない上での行動なのだから聞けば聞かぬ程、現実離れのした章子の話は過去の軌跡、現状の認識、将来の願望に



及ぶ。禅修行の導師と弟子の間答ではなく、程よく品のある所作、はかなげな風情、潤んだ視線で一途に、訴ったえられたら理不尽な事でも厳しい返答はばかりだろう。

余りに、荒唐無稽な事柄を真顔で話す人と対した時、話の内容の是非よりも、心中にて、この目の前の人の、今の生活・在りよう・生まれ・育ちの推量に先ず視点が向かってしまうソレである。男の甘さ、弱さ、優しさ故も。

⑤ 当時、禅宗の僧侶に妻帯は許されていなかった。（表向きは）。青年僧の時は勿論戒律通りだが、中堅以上になると女性を寺外に住ませたり、庫裏でも一番奥座敷に住ませ寺内の自由な行動を制約され、宗門檀家をはばかり正式な入籍も多くはなかった様だ。禅師は思ったに違いない。「こんなに、訳の分っていない女性、私が護らねば、生きて行けない。これも仏縁か」と。さすがに榮松寺には置けない。増尾の実家近くを手配縁者に世話を依頼して、当座の住まいと生活を取り計らう次第とする。廣幡八幡神社近くの辻堂（寮）である。（39歳大正15年）

松戸 榮松寺はこんなに近く！



*今回の第15回と次回の第15.5回は初稿では一枚で作成のモノ。

R3.3改造版で2回に分割したので通しNoは15と15.5としてある。

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子⑤

さすがに榮松寺には置けない。増尾の実家近くを手配、縁者に世話を依頼
当座の住まいと生活を取り計らう次第とする。

廣幡八幡神社近くの辻堂（寮）である。 (39歳大正15年)

⑥ 2月の或る穏やかな日、筆者はこの辻堂を訪れた。寺に隣接している訳
ではなく旧家（数家）の私設墓所の面持ち。敷地150坪はあろうか。数家
の区画は大きく立派のもので屋号も彫られ由緒が感じられる。廣幡八幡神
社代々続く宮司の墓所でもあるという、辻堂はトタン屋根ながら15坪程か
横長の建物）、中を伺い知る事は叶わない。かつて念仏講の寄り合いに
使用されていた。濡れ縁の下に、今は懐かしい「火鉢」がしまわれていた
その数6ヶ。電気は引かれている。直近で、この火鉢に炭火が入るのは、
いつの事だろう。

⑦ 縁に座りしばし瞑想の時、昼下がり飽く迄静寂、たまに聴く風の声は
隣接する竹林のそよぎ。目を閉じれば、気分はもう大正末期。章子は何を
想う。戒仙禅師の計らい厚情は憐憫をも色濃く内包、それに気づかぬとも
胸安らかにはいられなかったはず。

⑧ 墓所をでると、在の古老に出会う。厚かましくも筆者は聞く。
問【ココに大正期女性がいた事があるとの事、何か、ご存じですか？
少林寺の由縁碑に書かれてある豊田さんとは？、お寺隣接の墓地ではない
この様な墓所は何？】

古老答えて曰く。答【詳しくは知らないが確かに女性はいた。頭がとて
もよく、キチガイと紙一重、戒仙禅師が世間をはばかって、ココに住まわ
せた。豊田さん宅は神社を左へ行って、2軒目の野菜直売の家、かの女性
の生活の面倒を見たと聞いている。ここの墓所を、我々は「リョウ」と言
っている。漢字は分からない。霊（リョウ）・陵（リョウ）なのか。それ
とも別か。辻堂は以前、茅葺屋根だったが戦争の後で替えられた。
以前は茅葺屋根だったが戦争の後、建て替えられた】・・・と。

「注：後日リョウは「陵」の字の可能性が大と判明した。」

⑨ この辻堂に、章子がどの位居たのかは不明。昭和2年に戒仙禅師は大徳寺塔
中の聚光院住職の常職となった、それを追って上洛、同寺で同居を始めるの
で増尾での生活は1年強位か。

この上洛から終焉迄19年、章子の人生は更に悲惨さを増してゆく事になる。

少林寺境内にある、章子の歌碑は、この増尾時代に詠まれたものだ。

(40歳昭和元年)

江口章子ゆかりの、辻堂（念仏堂）の場所と豊田家の場所関係図



廣幡八幡社と鳥居右側の小道を直進
突き当りを右折20m、鳥居から3分。



辻堂入口



奥に見えるのがお堂



少林寺 彷徨う詩人 江口 章子⑥

- ① 増尾在住に終止符をうった章子、戒仙禅師が聚光院、常職の住職になった為、庫裏（住職の生活空間の意）の奥室ではあるが、一緒に住む念願の生活を手にする。禅師の慈愛は、まるで父親が実の娘に対する様（さま）章子も又父親に甘える童女の様、病いがちな章子の為だけに女中の一人をあてがう。鬱の心を慰める為か、初めての詩文集「女人山居」の発刊行を後押しする。殆ど、自費出版に近かったのでは。しかし、赤い長襦袢姿で寺内を徘徊しだす奇行は、徐々に寺内、市内に噂となる。禅寺としてあってはならない事だった。（41歳昭和3年）
- ② 生田春月という詩人がいる。大正末～昭和初に活躍、昭和5年に瀬戸内航路で投身自殺をした。享年38歳、この詩人は章子の「モト彼」であった。前月号で紹介した様に、章子には（モト、マエ）の意識が薄く全てが現在進行形の「カレ」、悲嘆にくれる。詩人同士の共通の美学からか、共に死の約束さえしていたのだ。発刊した詩文集に居住を“聚光院”とした寺内、同居が大問題化する。為に、戒仙禅師は宗門より檀家筋より激しく非難をされてしまう。貫主候補の目は無くなり、大徳寺追放か章子との別離かを要求される。（43歳昭和5年）
- ③ この時戒仙禅師の行動は特筆に値する。章子を擁護したのみならず教団がひた隠しする寺内妻帯の既成事実を暴露して本山へ反旗を翻す。婚姻届提出を世間に公表し、新聞の取材に答える。「かいつまんで言えばとても孤独では生きてゆけぬ彼女を、捨てておけなくなったので結婚するのです」と。宗門に対しても、聚光院への居座りを宣言、本山当局は困惑を増しつつには沈黙化してしまう。
- ④ 春月の死や止まぬ批難の目、鬱々と暮らす章子、西国三十三ヶ所巡例に出発、托鉢でその日の糧を得る厳しい修行の日々、結核からくる微熱にも悩まされる。禅師はここでも、行く先々に手紙や金を送り、配慮の依頼をし陰ながら支える。が、巡礼後章子の精神の病が更に激しく発症、京大病院精神科に入院。2ヶ月で退院。病名「突発性痴呆症」今でいう「認知症」の始まり。（44歳昭和6年）

- ⑤ 茶道千家の大法要が菩提寺、聚光院で営まれた。大檀家の千家宗家、大徳寺本山、政財界のお歴々が参列の中、章子は驚天動地の所業をなす。本堂で法要が進行する、庭にある沙羅双樹の根本に行った章子着物を脱いで裸体となり座禅を組んだのだ。直ちに奥へ引き込まれるのだが、法要は威厳の無いものとなった。正気の沙汰ではない、では狂気か、又は確信犯か、誰にも分からない、おそらく本人にも。禅師は徹頭徹尾章子をかばう。「病気のせい悲しい病気のせいだ」と。（46歳昭和8年）



章子の巡礼姿

- ⑥ 信州蓼科にある柳原白蓮の別荘に、遊ぶひと時を持つ。同地を気に入った章子はここに観音堂の建立を思い立つ、戒仙禅師に当然相談をさせていただく。仏法で言えば徳を重ねる事だし章子の修行や気晴らしにもなる。又前年の座禅騒動のほとぼりを更に冷すにも良い。大賛成、積極的に応援小さいお堂が建立される。有髪ながら、この頃より尼僧の振る舞いが多くなる。第2の出版、詩集「追分の心」がこの年発刊。これも禅師の厚情か。（47歳昭和9年）
- ⑦ 章子は蓼科の観音堂、その増築に奔走し、信州と京都を何度か往復忙しい日々を送っていた。その中、岐阜虎溪山の参禅修行に向かう汽車の中で1回目の脳溢血に倒れる。病院で治療後、戒仙禅師が兼務住職を務める岐阜御嵩の吉祥寺で臥せる。半身不随、体の不自由さ故か、精神の不安定錯乱も増増す。禅師に対しては、もはや童女ですらなく、まるで赤子であった様。京都聚光院へ帰りたい意向はあったが、最早そこに章子の居場所は無くなりつつあった。流石に禅師にも章子は重荷になり始める。（50歳昭和12年）
- ☆次号では 章子の51歳～終焉までを探訪する。

（文責：荻野） 平成25年7月

少林寺 彷徨う詩人 江口 章子⑦



- ① 京大徳寺へも蓼科観音堂へも行くのは叶わず、修行の道も閉ざされた、失意の内、岐阜県可児郡御嵩吉祥寺での不自由な生活は続く。禅師より章子の介護を兼ねた修行中の尼僧が使わされる。名は妙貞。章子は妙章を名乗っていた。新聞で北原白秋に関する記事が飛び込んで来た。糖尿病で眼底出血（失明の危機の由。懐かしきアノ日を思い浮かべながら心を痛めたことだろう。白秋の治癒祈願を戒仙禅師に依頼するのも章子らしい。
- 昭和13年12月、突然章子は離婚届けを、夫戒仙に相談ナシで提出。理由は不明、多分それが如何なる最終的な意味を、事態をまねくのか本人も分かってはいたのではないか。子弟の始まりより17年後、増尾時代より12年後、入籍より8年後のことであった。（51歳昭和13年）
- ② 住まいは変わらず岐阜御嵩の吉祥寺、金額は減ったものの禅師からの仕送りは続いていた。妙貞の代わりに卜部鉄心（うらべてっしん）という若い僧侶が御嵩吉祥寺と蓼科音堂の住職になる。鉄心は身体不自由な章子をよく支え仕えた。章子の希望により、故郷の豊後香々地や別府の病院まで連れていっている。章子は鉄心を兄のごとくに甘えたが、彼は師匠から与えられた使命として、仕えていたのだろう。
- 鉄心は辻潤の流れを汲むアナ-キスト上がりの異色僧侶だった。（53歳 昭和15年）
- ③ 若い時からの持病である「結核」は完治せぬまま別府の病院を退院して吉祥寺へ戻る。本山の命により鉄心、章子と離れ四国の寺に赴任して行く。世話をするのは村の檀徒。
- 2度目の脳溢血が襲う。更に介護度が増し、難渋した檀徒は、京都大徳寺聚光院の戒仙禅師の元へ連れてゆくが、妻ですらない章子、同寺に居場所がある筈もない。そのまま京都山科醍醐の養老院（同和園）に収容される。（55歳昭和17年）

- ④ 同和園入院後3度目の脳溢血。同室の老婆の見舞客柏野久恵と出合う、心根の優しいこの京都女性久恵は見舞い相手の死亡後も、章子に救いの手を差し伸べてくれた。章子は最後の保護者を得たのである。戦時下章子の身柄相談の為、九州迄足を2度はこんでいる。（56歳昭和18年）



創立当初の同和園建物、京都の市内にあった

- ⑤ 昭和20年を迎え戦局更に激しく、同和園は軍事転用施設になり<養老院>機能としては閉鎖されてしまう。章子はついに身を置くところが無くなってしまった。久恵の必死の懇願により実家の義兄は仕方なく帰省を承諾した。しかし、戸主の義兄は高齢で兄嫁は鬼籍の人、同行した（背負って）久恵が、かの地で介護の役につく。（58歳昭和20年）



山科醍醐同和園

京都山科同和園とは
京都で初めて創設された「よる辺なき老人たち」を収容する総合的施設の養老院。（大正10年）理念や経営の母体は京都佛教会であった。創立当初は京都市内にあった（写真上段）が規模の拡大により郊外の醍醐に移転する（昭和9年）章子の入園は昭和17年なので当然この醍醐の施設だろう。一時軍の施設となったが、戦後は養老院に戻され令和の現在に至る。

少林寺 彷徨う詩人 江口 章子⑧



① 故郷香々地に帰郷後、脳軟化症を再々発症。
 久恵が京都の実家へ所要で帰っている時、章子息をひきとる。
 誰にも看取られることもなく、臨終が夜中なのか、明け方なのかもわからなかった。
 廃人と化した章子は、不自由な身体を引きずっての徘徊老人でもあった。冬であったが、危険な為、部屋には火の気も入れられてはいない。食事は家人より出されてはいたが痴呆によりその感覚がない。誰彼となく村人に唸って食をねだる姿はあまりにも無残で忍びない。鍵もかけられ殆ど座敷牢状態の部屋に臥していた。自ら下(しも)の始末も出来ず、する人もいない。糞尿(ふんにょう)にまみれて仏(ほとけ)になった。

② 成仏出来たのだろうか？ 白秋の詩集「雀百首」が枕元に残されていたという。葛飾真間の新婚の住まい、江戸川小岩での生活、城ヶ島での旅情白秋とのあの「ひととき」が壊れ行く脳裏の中を何度も何度もよぎったのだろう。
 九州とはいえ12月末の29日、国東半島香々地(かかじ)に迫る周防灘の風と波は激しくも冷たい、空に海に荒れる灰色のうねり、それは恋の空間を思い切り飛翔し、心ゆく迄彷徨い、時空を突き抜け、恋に殉じた、章子への賛歌か、突出して孤立化した姿への、共感か・嗚咽か・鎮魂歌。
 戒名： 妙章信尼 (59歳 昭和21年没)

③ 章子の死を知った戒仙禅師黙って本堂へ行き、お経をあげた、そしてつぶやく「可哀相な女だった」と。その後も脳裏から消えることは無い。高齢になる程、章子の事を口にするのが増えたという。沙羅の花咲く季節には散った花びらを、水の張った小盆に浮かべ、章子の写真に供えたとも聞く。「わしという坊主は、仕様のない坊主じゃ、人ひとり救えず、本当にダメな・・・」と嘆きつつ、昭和47年92歳の年齢で入寂した。お骨は入っていないが、故郷で養子先の増尾少林寺の墓にも眠る。

④ 現在、国東半島香々地、海を見下ろす岬に章子の歌碑が建立されている。(下写真)昭和53年に建立された、同時に市(豊後高田市)の教育委員会で冊子も編纂された。増尾の辻堂では【たまに訪ね来る人有り。】と土地の古老も言っていた。章子は確かに生きた生きぬいた。足跡(そくせき)を今なお、たどる人がいる。人々が章子に想いを馳せている。少しでも供養になればと願って止まないものである。 合掌



豊後高田市香々地 長崎鼻岬の歌碑



左歌碑の説明板



江口 章子 20歳頃



少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子⑨

① 3月より8月迄9回に渡り、江口章子の生涯と人となり俯瞰してきた。今回で最終回になるが、このシリーズの冒頭に紹介した、少林寺境内の歌碑に立ち戻り、その和歌の意味を想い描いて同女への供養としたい。

「手賀沼の みずのほとりを さまよいつ
葦かる音を わがものとせし」

解釈のキーは「さまよい」と「葦かる音」？との思いは変わらない。普通、和歌や俳句は同時に何首も詠む。その何首かを概観考察して、その一首に籠る作者の心情や情景を解釈してゆくのだ、が、資料なくこの一首のみからの推量で致し方なし。

「さまよい」

- ② 章子の不幸は血族の「縁」の薄さから始まる。
4人兄弟の末娘として産まれるが
6歳年上の兄を事故で失う（1歳の時）
長男を失って、気丈な3女章子を溺愛してくれた父を病で失う（11歳の時）
次姉を出産で失う（14歳の時）
大黒柱母を病で失う（17歳の時）
よき理解者祖母を失う（19歳の時）
家出した長姉を病で失う（25歳の時）
章子が道を見失った時、誤った時身近な肉親は誰もが黄泉の人だったのだ。
突飛な行いを繰り返す章子、父母姉等からの情愛の籠った「さとし・叱責示唆・助言・支援」を受けようがなかった。
- ③ 実態としての故郷を失った章子、糸の切れた風船宜しく、どの地に住んでも落ち着かず、疑似としての「故郷」も持ちえなかった。だからこそ、いや、それ故に斯程、帰郷と離郷を繰り返す放浪の人生を歩む。現身がそうである以上、心の在り様（よう）は、はかなく、もろく、激しく、粉雪の如く舞上がり、漂い・・・舞い落ちる。

- ④ 増尾在住時、廣幡八幡近くの墓所辻堂に住いた。鬱々と過ごしていた、とある日の昼さがり、この増尾の地が東葛飾郡、それはあの白秋との初めての住まい「真間・亀井院」と同じ！
「千葉県の郡」距離にして4里程の所だ。フト気づく章子、白秋と別離の傷は癒えていた筈なのに、薄皮が破れ血が噴き出す。戒仙禅師の計らいで、今ある生活、安らぎも思念の外抑えきれない激情が胸の奥より噴出錯乱状態になる。草履を引っかけ戸外へ飛びだしていったのではないか。林を、畑を、田を抜け手賀沼にそそぐ沢、大津川へ。
彷徨（さまよう）のが、自分らしいと、運命づけられているの思い出したかの様に、安住は自分らしくない・・・と。

葦かる音

- ⑤ 日本国の古来の呼称として「豊葦原瑞穂の国」（とよあしはらみずほのくに）がある。豊かな葦の原が続く水辺の郷、かつての手賀沼のほとりに佇めば眼前に弘がる情景は縄文、弥生迄さかのぼる「まほろぼの郷」。大和「やまと」の国の原風景だ。
- ⑥ 葦（あし）と（よし）は同一のモノ。丈が2mにも及ぶ一年草。（あし）→（悪し）の語感が嫌われ、（よし）→（良し、吉し）と言い換えられたという。主に西日本で（よし）と言われ、東日本では旧来のまま（あし）と呼ばれていたそう。最も例外もあるが。江戸吉原遊郭は有名だが、建設予定地は一帯が葦の原だった為、あし原遊郭と呼ばれ、後、よし原に変更、字を「吉」そこで「吉原」に落ち着いた
- ⑦ 先日ふる協で、農家を営む土地の古老に聞いた。【葦を刈った事ありますか？切るとどんな音がしますか？】と。古老答えて曰く。
【萱はあるけど葦は無い。
萱は薄（ススキ）の別名で山や野にある。葦は水辺のものだ。稲刈る鎌は小型で刃がノコギリ状、挽くように刈る。萱狩る鎌は「山鎌」といって大型で刃にギザがない。
萱の束を後半身に抱える様に抱き、湾曲させ、右手の鎌で2～3度切るように刈る。音は「ズアクウッ・ズアクウッ】重く乾いた音の様だ。更に大きい葦も同様か？ 次号に続く

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子^⑩

☆ 3月より8月迄9回に渡り、江口章子の生涯と人となり俯瞰してきた。今回で最終回になるが、このシリーズの冒頭に紹介した、少林寺境内の歌碑に立ち戻り、その和歌の意味を想い描いて同女への供養としたい。

「手賀沼の みずのほとりを さまよいつ
葦かる音を わがものとせし」

解釈のキーは「さまよい」と「葦かる音」？との思いは変わらない。普通、和歌や俳句は同時に何首も詠む。その何首かを概観考察して、その一首に籠る作者の心情や情景を解釈してゆくのだ、が、資料なくこの一首のみからの推量で致し方ナシ。以下は前号の続き歌碑の解釈。

葦かる音 (続き)

- ⑧ 葦も萱も一年草、秋には枯れる。稲刈りの後の冬の時期、村総出の共同作業であつたらしい。秋祭りも終わっている。60年程まえ吉永小百合の「草を刈る娘」という映画があつた、残念ながら私は観ていないが多分二世前、農村の情景を描いた映画だったのであろう。農閑期の楽しいイベントだったのでないか？この和歌は初冬の晴れた日に詠まれていたのだ。稔りの後の労働、楽しげであつたカモ
- ⑨ 辻堂を飛び出し、あて無くいつときを彷徨う章子、髪はどうであつたらうか？鬘を結っていたか、洗い髪風情か、はたまた5月号写真で紹介したすでに短髪か。時をへず鼻緒が切れた草履を下げた、力なげな両の手は虚空の何かを掴むよう。よろける足元は踏みしめたくとも、受け止めてくれない泥土のよう、宙に浮く。(私は、どう歩けばいいの、何にすがればいいの、何を見つめればいいの、行く先はどこ、) 葦を刈る重く乾いた音が幾重にも、村の衆総出のざわめきが、若い村娘の嬌声が章子の周囲にここかしこ。

⑩ のち、落ち着いた章子は思う。(私の泥水のような胸の内の思いも、切り刻んだ葦や、あの村人の生活の息吹を織り込めれば、確かな手ごえを持つ、形になるのでは？
恋する人の息づかいが確かに感じられる、その姿が、見えてくるのでは・そうありがたい、そうあれば、もう少し生きられる・)と。
私(筆者)はこの時期の章子が最とも輝き美しかったのではと推測する。子をなしていず、生活者としての自己を否定している、恋の悩みはあつても、当然生活の疲れはない、異次元の矜持を保ち純真な息女として気品は保たれた盛りの39歳。
狂気すら秘めた、男を魅了する純な眼差しであつたらう。

☆章子の肖像写真集 いづれも撮影年は不明



☆上記の男性は北原白秋

新ふるさと・探訪 第21回 お寺・神社

少林寺 彷徨う詩人

エグチ アヤコ
江口 章子^⑩ 番外編

☆ 江口章子、由縁箇所、関係書籍等のご紹介

☆ 章子の作品を四編紹介、解釈、鑑賞はお任せします。

① 短文：壁の中のキリギリス

春もまだ浅いころ 黒い土の中に眠っていたキリギリスが
そのまま壁土の中に塗りこまれてしまった
秋が来て 新しく建った丘の洋館に やせおとろへたキリギリスが
夜になると悲しい唄をもらす
永久に封じられた 厚い壁の中から (追分の心)

注) 白秋との別離直後の作か？チョット恨めしい気持ちなのがぞく。

② 短文：鳩笛

たよりない朝だ、
うしろから来て、ぎゅうと抱きしめて貰いたいやうな朝だ
だれかに、ぎゅうと抱きしめて みてほしいやうな朝だ
藁(がま)を殺して そっと男の顔を描く
千日千枚血の指でそっと 男の (女人山居)

注) 白秋と別離後、戒仙和尚と出逢う前、山中で一人住まいの時の作品
ここでの舞台は故郷の豊後高田と思われる

③ 和歌

さわ桔梗 おのが心の紫は
秋山ふかき 湖(うみ)にこそ うつせ (女人山居)

注) 時期的に戒仙和尚との出逢いの後の作らしい、とするとこの湖(うみ)は手賀沼のこと？
昭和初年頃の手賀沼の風情がかいま見られるようで面白いではないか

④ 和歌

かくごせし 心なりけり吾しひて
笑みつつおくる 両掌(りょうて)あわせて (女人山居)

注) 章子の知り合いの男性記者が中国大陸へ仕事で渡るのを見送った時の心情を謳って
いる、上段の散文の激しさはなく安全を祈る姿は別人のようだ

☆ 歌碑あるの場所
増尾山少林寺
臨濟宗大徳寺派
増尾3-6-1
同寺のHPで寺の沿革紹介、戒仙和尚の墓もある。



☆ 土地の人呼ぶ
陵(りょう)
廣幡八幡に近接
大正15年章子
住み「手賀沼の」の歌を詠む。
陵(りょう) = 辻堂の現在の姿。



☆ 章子 & 白秋新婚
時代の住まいの1ツ
亀井院 日蓮宗
市川市真間4-4-9
この寺の「離れ」に住む、向かいは
手児奈聖堂、国府台駅より 徒歩10分



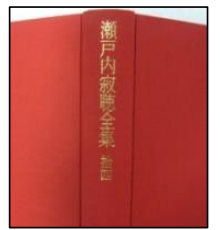
☆ 紫烟草舎(しえん
そうしゃ) 市川市
国府台3-9
里見公園内にある
矢口駅 徒歩16分
章子 & 白秋新婚
時代の住まいの1ツ江戸川区より移築



☆ 栄松寺
臨濟宗大徳寺派
松戸市南花島
1-14-1 上本郷
より徒歩10分
章子が戒仙和尚を追慕し九州→京都を
経て松戸の同寺へ。そして増尾へ。



☆ 瀬戸内寂聴著
「ここすぎて」白秋と
3人の妻 新潮社
最初の妻俊子、2度
目の章子、3度目の
菊子を描いているが
半分以上は章子との生活を記述。



☆ 末永文子著
「城ヶ島の雨」真説・江口
章子の生涯、昭和出版
雨が降る降る〜で始まる
白秋の詩は章子と投宿
した時の創作とこの作者は
言い切る。



☆ 杉山宮子著
「女人追想」崙書房
北原白秋夫人 江口章子
の生涯、著者杉山女子は
流山郷土資料館の学芸員
地元での取材もあり身近感
がもてる。同性に優しい視点。



☆ 豊後高田市発行
豊後高田市教育委員会
「江口章子」若き日白秋
大成に寄与した-郷土の
編纂・発行などはの誇り
と哀惜が感じられる。
頒価500円、市へ直の申し込みで入手可。



◎ 本稿にて江口章子編は終了です。
後日、新たな事実が発掘できた場合
(私の) 気力・体力が残っていた
場合は少し復活するかもしれません。

◎ 次号からは観音寺の探訪を予定して
おります。文責：萩野 平成25年11月